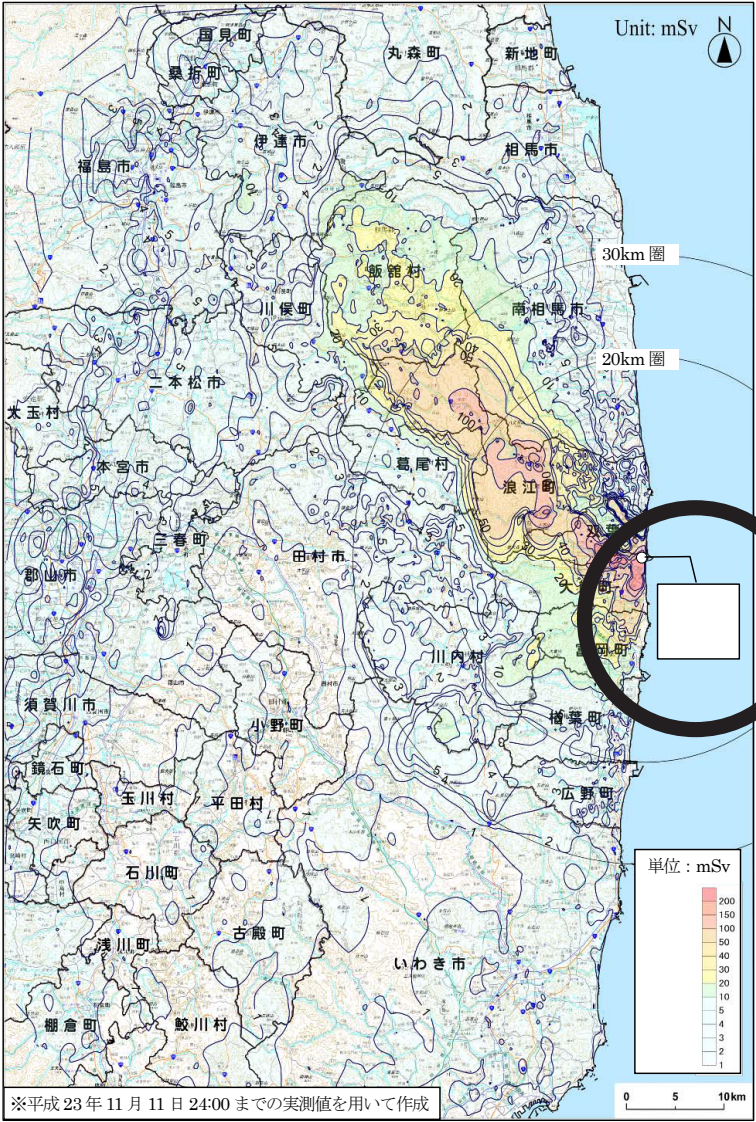


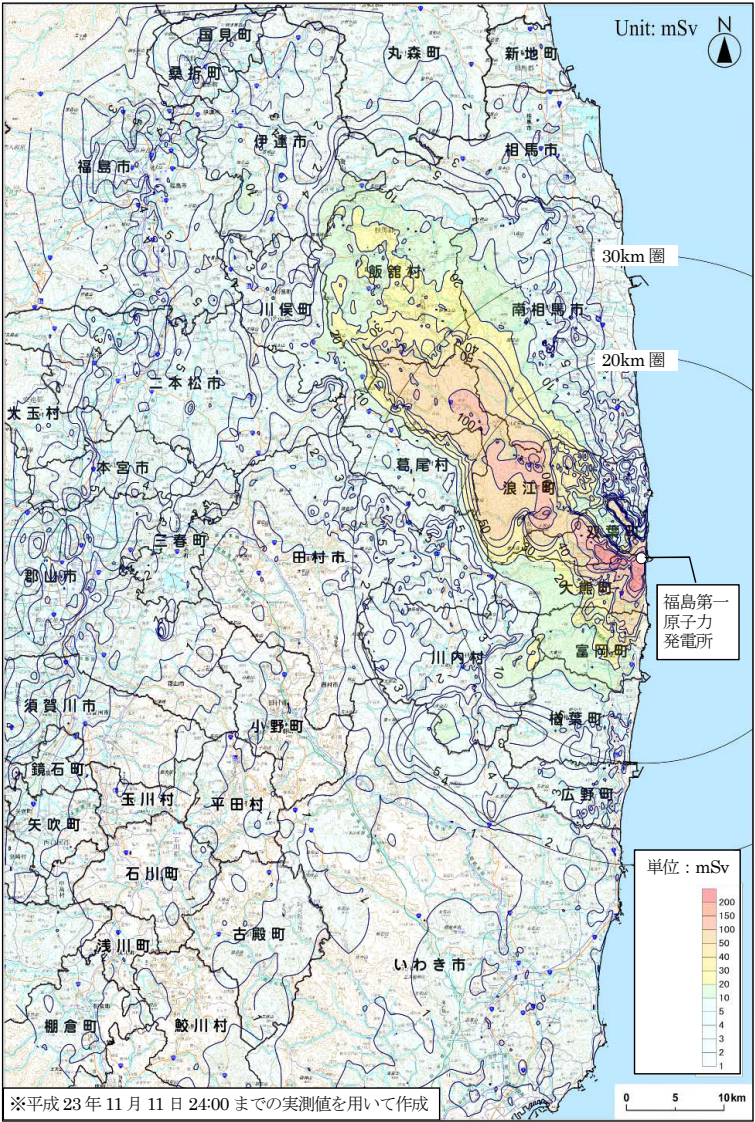
中間報告（本文編） 正 誤 表

p40 誤



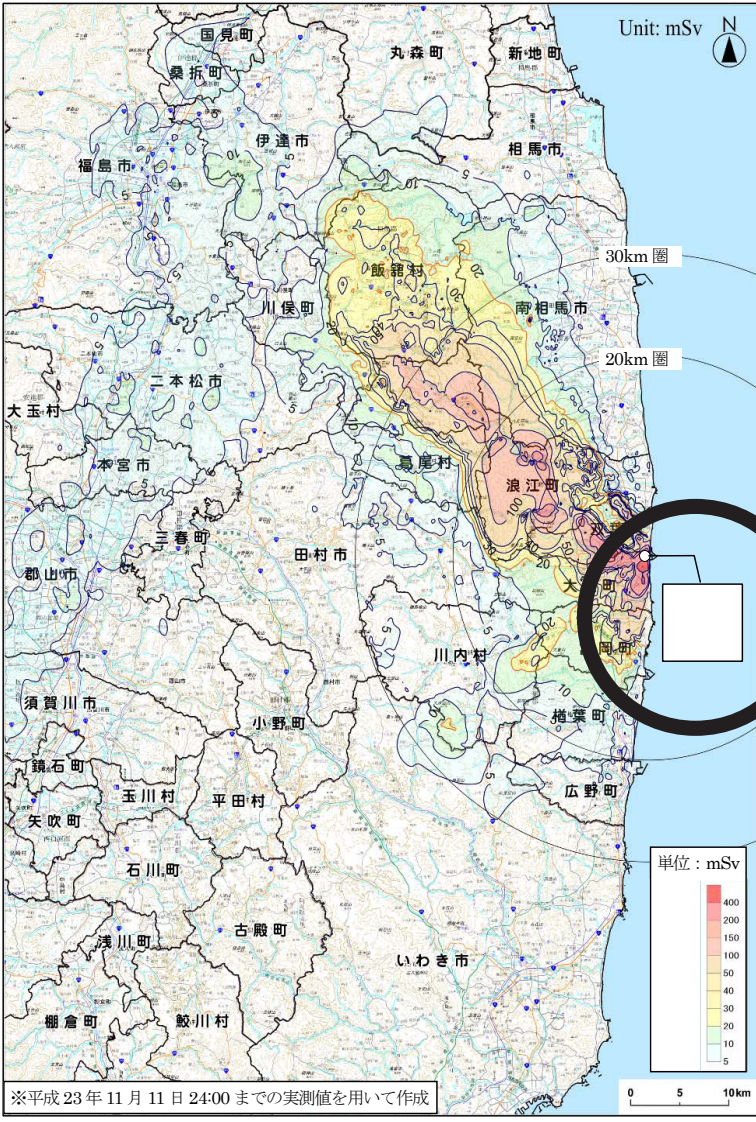
図Ⅱ-4 積算線量推定マップ（平成 23 年 11 月 11 日までの積算線量）
文部科学省「放射線量等分布マップについて」を基に作成 背景地図：電子国土

p40 正



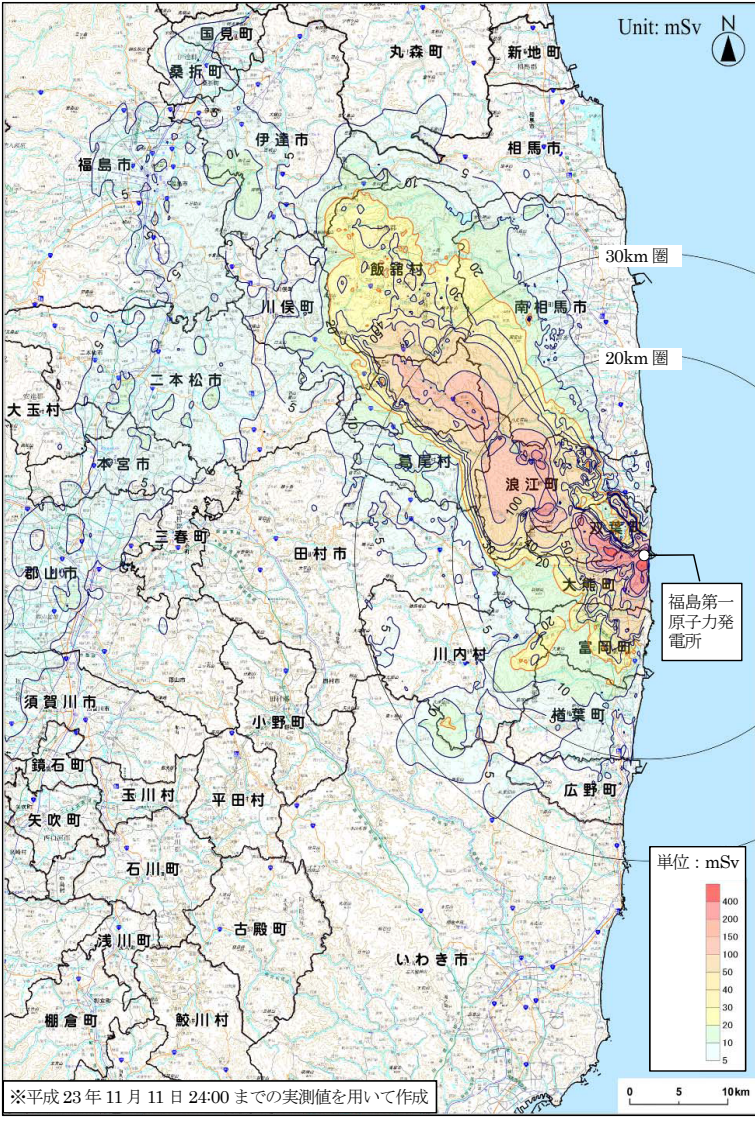
図Ⅱ-4 積算線量推定マップ（平成 23 年 11 月 11 日までの積算線量）
文部科学省「放射線量等分布マップについて」を基に作成 背景地図：電子国土

p41 誤



図Ⅱ-5 積算線量推定マップ（平成 24 年 3 月 11 日までの積算線量）
文部科学省「放射線量等分布マップについて」を基に作成 背景地図：電子国土

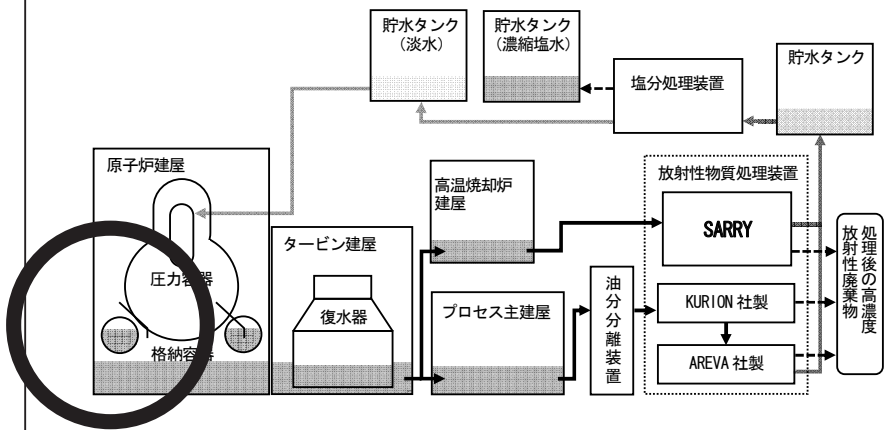
p41 正



図Ⅱ-5 積算線量推定マップ（平成 24 年 3 月 11 日までの積算線量）
文部科学省「放射線量等分布マップについて」を基に作成 背景地図：電子国土

p342 誤

図V-1 循環注水冷却の系統概要図（8月19日以降）（東京電力作成資料を基に作成）



（3）原子炉格納容器の冠水に係る経緯

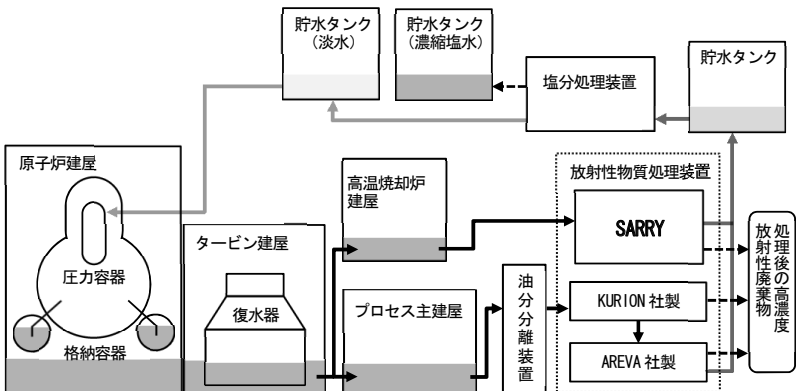
東京電力は、工程表（4月17日公表版）において、原子炉を安定的に冷却するための対策として、ステップ1において1号機及び3号機の原子炉格納容器を燃料域上部まで水で満たす（以下「冠水」という。）とともに、循環注水冷却を検討・実施することとした。一方、2号機は原子炉格納容器からの漏えいが多く、損傷が大きいと判断し、損傷箇所の密閉策を継続して検討・実施し、損傷箇所密閉後に1号機及び3号機と同様に冠水及び循環注水冷却を実施することとした。

5月5日、東京電力は、1号機への冠水の実施に先立ち、保安院に対し、冠水の実施により、注水が停止した場合にも燃料の温度上昇までの時間的余裕が得られること、原子炉格納容器からの漏水量が増加しても環境中へ流出するおそれはないことなど冠水の方法や評価等を記した「福島第一原子力発電所第1号機における燃料域上部まで原子炉格納容器を水で満たす措置の実施に係る報告書」を提出した。同日、保安院は、提出された報告について、必要な措置であると評価し、その旨を東京電力に伝えた。

東京電力は、5月6日から1号機原子炉への注水量を増やし、原子炉格納容器内の圧力変化から水位を計算し、原子炉格納容器の損傷具合を推定した結果、原子炉格納容器に漏えい孔が存在し、冠水のための注水を継続すると、漏えい量が増加すると認められた。また、T/Bの高濃度汚染水はR/B由来であると認められたため、

p342 正

図V-1 循環注水冷却の系統概要図（8月19日以降）（東京電力作成資料を基に作成）



（3）原子炉格納容器の冠水に係る経緯

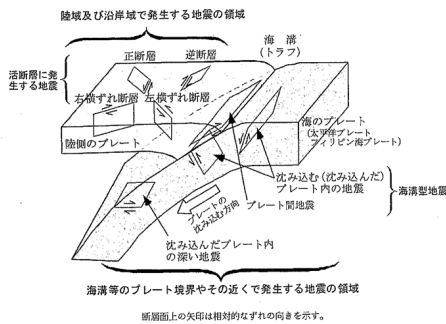
東京電力は、工程表（4月17日公表版）において、原子炉を安定的に冷却するための対策として、ステップ1において1号機及び3号機の原子炉格納容器を燃料域上部まで水で満たす（以下「冠水」という。）とともに、循環注水冷却を検討・実施することとした。一方、2号機は原子炉格納容器からの漏えいが多く、損傷が大きいと判断し、損傷箇所の密閉策を継続して検討・実施し、損傷箇所密閉後に1号機及び3号機と同様に冠水及び循環注水冷却を実施することとした。

5月5日、東京電力は、1号機への冠水の実施に先立ち、保安院に対し、冠水の実施により、注水が停止した場合にも燃料の温度上昇までの時間的余裕が得られること、原子炉格納容器からの漏水量が増加しても環境中へ流出するおそれはないことなど冠水の方法や評価等を記した「福島第一原子力発電所第1号機における燃料域上部まで原子炉格納容器を水で満たす措置の実施に係る報告書」を提出した。同日、保安院は、提出された報告について、必要な措置であると評価し、その旨を東京電力に伝えた。

東京電力は、5月6日から1号機原子炉への注水量を増やし、原子炉格納容器内の圧力変化から水位を計算し、原子炉格納容器の損傷具合を推定した結果、原子炉格納容器に漏えい孔が存在し、冠水のための注水を継続すると、漏えい量が増加すると認められた。また、T/Bの高濃度汚染水はR/B由来であると認められたため、

p371 誤

プレート内にすらしした想定敷地下方の地震を、④震源を特定せず策定する地震動としては詳細な地質学的調査によっても震源位置と地震規模をあらかじめ特定できない地震をそれぞれ選定した（図VI-4及びVI-5）。そして、これらの地震による基準地震動 S_s については、①基準地震動 S_s -1（内陸地殻内の地震・プレート間地震の評価結果を上回るように設定）：最大加速度 450 ガル、②基準地震動 S_s -2（海洋プレート内地震の評価結果を上回るように設定）：最大加速度 600 ガル、③基準地震動 S_s -3（震源を特定せず策定する地震動）：最大加速度 450 ガルと算出した。



図VI-4 日本列島とその周辺で発生する地震のタイプ

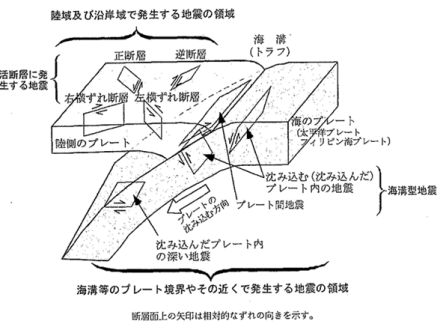
（出典）社団法人日本電気協会原子力規格委員会
「原子力発電所耐震設計技術指針（JEAG4601-2008）」
（平成20年12月19日）

東京電力は、前記基準地震動 S_s を用いて福島第一原発の施設・設備についての地震応答解析を実施し、その結果、原子炉建屋の耐震壁の最大せん断ひずみは評価基準値 $(2.0 \times 10^{-3})^3$ を満足しており、耐震安全性が確保されていると判断した。また、安全上重要な機器・配管系の耐震安全評価についても、前記基準地震動 S_s を用いて地震応答解析を実施し、求められた発生値が評価基準値を満足しており、耐震安全性が確保されていると判断した。

このような耐震安全性の確認作業を通じて東京電力が行った福島第一原発につい

p371 正

プレート内にすらしした想定敷地下方の地震を、④震源を特定せず策定する地震動としては詳細な地質学的調査によっても震源位置と地震規模をあらかじめ特定できない地震をそれぞれ選定した（図VI-4及びVI-5）。そして、これらの地震による基準地震動 S_s については、①基準地震動 S_s -1（内陸地殻内の地震・プレート間地震の評価結果を上回るように設定）：最大加速度 450 ガル、②基準地震動 S_s -2（海洋プレート内地震の評価結果を上回るように設定）：最大加速度 600 ガル、③基準地震動 S_s -3（震源を特定せず策定する地震動）：最大加速度 450 ガルと算出した。

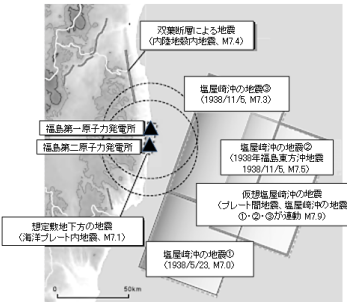


図VI-4 日本列島とその周辺で発生する地震のタイプ

（出典）社団法人日本電気協会原子力規格委員会
「原子力発電所耐震設計技術指針（JEAG4601-2008）」
（平成20年12月19日）

東京電力は、前記基準地震動 S_s を用いて福島第一原発の施設・設備についての地震応答解析を実施し、その結果、原子炉建屋の耐震壁の最大せん断ひずみは評価基準値 $(2.0 \times 10^{-3})^3$ を満足しており、耐震安全性が確保されていると判断した。また、安全上重要な機器・配管系の耐震安全評価についても、前記基準地震動 S_s を用いて地震応答解析を実施し、求められた発生値が評価基準値を満足しており、耐震安全性が確保されていると判断した。

このような耐震安全性の確認作業を通じて東京電力が行った福島第一原発につい



図VI-5 東京電力が選定した複数の地震

東京電力「福島第一原子力発電所3号機の耐震安全性について」（平成22年5月）を基に作成

³ 当該評価基準値の数値は、社団法人日本電気協会原子力規格委員会公表に係る「原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601-2008）」に定められており、鉄筋コンクリート造耐震壁の終局せん断ひずみに2倍の安全率を持たせたものである。

³ 当該評価基準値の数値は、社団法人日本電気協会原子力規格委員会公表に係る「原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601-2008）」に定められており、鉄筋コンクリート造耐震壁の終局せん断ひずみに2倍の安全率を持たせたものである。

中間報告（本文編）正誤表

p145 誤

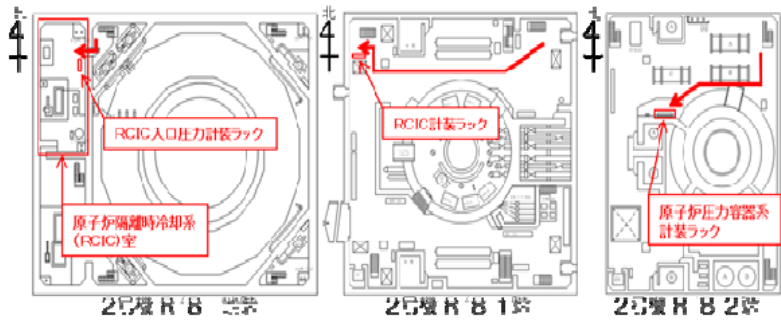
えた。

② 3月12日1時から同日2時にかけての頃、当直は、2号機のRCICの運転状態について現場確認を実施するため、セルフエアセット、小型懐中電灯、長靴を装備して現場確認のため2号機R/B地下1階にあるRCIC室に行った。

RCIC室は、長靴にかろうじて水が入らないくらいの高さまで水が溜まっている状態で、当直が扉を開けると水が流れ出てきたため、すぐに扉を閉め、入室できなかった。その際、当直は、RCIC室から、かすかな金属音を聞いたものの、ポンプ又はタービンの回転部分の駆動音を確認できず、PHSで1/2号中央制御室に連絡も取れないので、一旦1/2号中央制御室に戻り、当直長にその状況を報告した。

その後、同日2時10分頃、当直は、再度、RCICの作動状態の確認を実施するため、前同様の装備をして、2号機R/B地下のRCIC室に向かった。このとき、RCIC室内の水たまりの量が増えていたが、当直は、RCICの作動状態を把握するため入室し、同室入口にあるRCIC入口圧力計装ラックでポンプ入口圧力計の針が小刻みに振れており、運転音とも思われる金属音を確認したが、RCICが作動中であるとの確証までは得られなかった。

そこで、当直は、2号機R/Bの1階及び2階にある計器ラックで2号機の原子炉圧力とRCICポンプ吐出圧力を確認すれば、RCICの作動状態も分かると考え、1階のRCIC計装ラックでRCICポンプ吐出圧力を確認し、2階の原子炉圧力容器系計装ラックで原子炉圧力を確認しに行った（図IV-2参照）。



図IV-2 計装ラックの位置及びその確認経路 東京電力作成資料を基に作成

p145 正

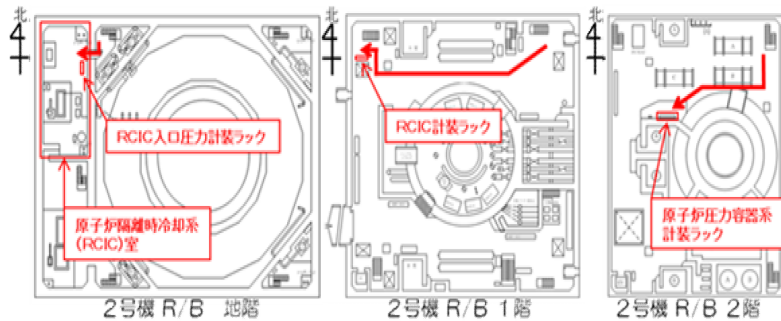
えた。

② 3月12日1時から同日2時にかけての頃、当直は、2号機のRCICの運転状態について現場確認を実施するため、セルフエアセット、小型懐中電灯、長靴を装備して現場確認のため2号機R/B地下1階にあるRCIC室に行った。

RCIC室は、長靴にかろうじて水が入らないくらいの高さまで水が溜まっている状態で、当直が扉を開けると水が流れ出てきたため、すぐに扉を閉め、入室できなかった。その際、当直は、RCIC室から、かすかな金属音を聞いたものの、ポンプ又はタービンの回転部分の駆動音を確認できず、PHSで1/2号中央制御室に連絡も取れないので、一旦1/2号中央制御室に戻り、当直長にその状況を報告した。

その後、同日2時10分頃、当直は、再度、RCICの作動状態の確認を実施するため、前同様の装備をして、2号機R/B地下のRCIC室に向かった。このとき、RCIC室内の水たまりの量が増えていたが、当直は、RCICの作動状態を把握するため入室し、同室入口にあるRCIC入口圧力計装ラックでポンプ入口圧力計の針が小刻みに振れており、運転音とも思われる金属音を確認したが、RCICが作動中であるとの確証までは得られなかった。

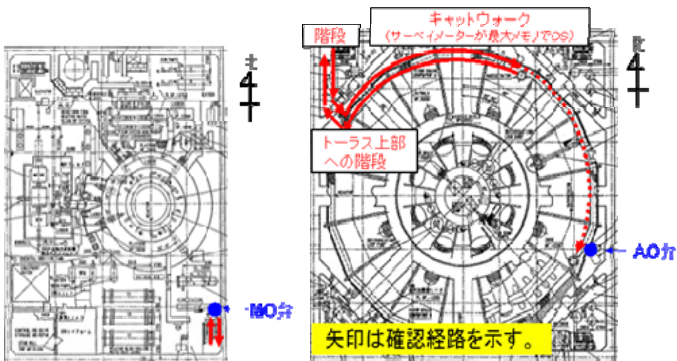
そこで、当直は、2号機R/Bの1階及び2階にある計器ラックで2号機の原子炉圧力とRCICポンプ吐出圧力を確認すれば、RCICの作動状態も分かると考え、1階のRCIC計装ラックでRCICポンプ吐出圧力を確認し、2階の原子炉圧力容器系計装ラックで原子炉圧力を確認しに行った（図IV-2参照）。



図IV-2 計装ラックの位置及びその確認経路 東京電力作成資料を基に作成

p152 誤

弁) 小弁を手動で開操作するため、1/2号中央制御室を出発し、1号R/B地下1階のトラス室に行った。しかし、この当直2名は、トラス室内のS/Cベント弁(AO弁)小弁の位置に向かう途中、線量限度100mSvを超える可能性が生じたため、S/Cベント弁(AO弁)小弁の開操作を断念し、同日9時30分頃、1/2号中央制御室に引き返した（図IV-4参照）。



図IV-3 MO弁の位置

東京電力「東北地方太平洋沖地震発生当初の福島第一原子力発電所における対応状況について」（平成23年6月）を基に作成

そして、当直長は、第2班からの報告を受け、トラス室内の放射線量が非常に高いため立ち入りは不可能と判断し、第3班による作業を断念した。

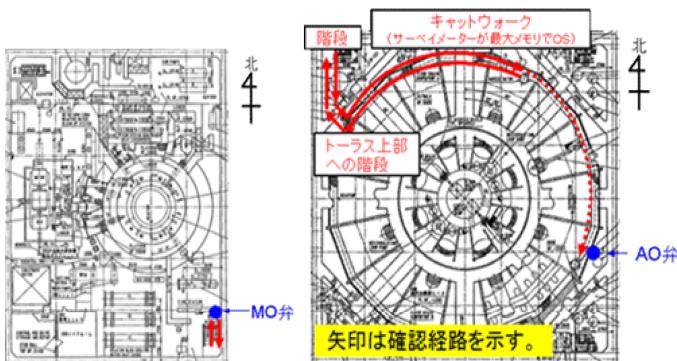
③ 発電所対策本部は、当直から、1号機R/B内の放射線量が高く、トラス室に行き S/Cベント弁(AO弁)小弁を手動で開操作できなかったとの報告を受け、手動で同弁を開操作するのを断念した。

S/Cベント弁(AO弁)には、小弁のほかにも大弁があったが、大弁を開操作するには、大弁駆動用の空気圧を送る計装用圧縮空気系(IA系)配管にある電磁弁を励磁して開とした上、IA系配管から空気圧を送る必要があった（資料IV-18参照）。

しかし、本来、S/Cベント弁(AO弁)大弁の駆動源となる空気圧を、IA系配管を通じて供給するため、既設の大型コンプレッサーが備え付けられていた

p152 正

弁) 小弁を手動で開操作するため、1/2号中央制御室を出発し、1号R/B地下1階のトラス室に行った。しかし、この当直2名は、トラス室内のS/Cベント弁(AO弁)小弁の位置に向かう途中、線量限度100mSvを超える可能性が生じたため、S/Cベント弁(AO弁)小弁の開操作を断念し、同日9時30分頃、1/2号中央制御室に引き返した（図IV-4参照）。



図IV-3 MO弁の位置

東京電力「東北地方太平洋沖地震発生当初の福島第一原子力発電所における対応状況について」（平成23年6月）を基に作成

そして、当直長は、第2班からの報告を受け、トラス室内の放射線量が非常に高いため立ち入りは不可能と判断し、第3班による作業を断念した。

③ 発電所対策本部は、当直から、1号機R/B内の放射線量が高く、トラス室に行き S/Cベント弁(AO弁)小弁を手動で開操作できなかったとの報告を受け、手動で同弁を開操作するのを断念した。

S/Cベント弁(AO弁)には、小弁のほかにも大弁があったが、大弁を開操作するには、大弁駆動用の空気圧を送る計装用圧縮空気系(IA系)配管にある電磁弁を励磁して開とした上、IA系配管から空気圧を送る必要があった（資料IV-18参照）。

しかし、本来、S/Cベント弁(AO弁)大弁の駆動源となる空気圧を、IA系配管を通じて供給するため、既設の大型コンプレッサーが備え付けられていた